### オルソポジトロニウムの寿命測定 による束縛系QEDの精密検証

#### 東大素粒子センター 片岡洋介

#### 2006.6.12 岡山大学

#### contents

# イントロダクション オルソポジトロニウム(o-Ps)について o-Psの寿命測定の手法について

#### II. セットアップ

- 現在進行中の実験について

#### Ⅲ. 解析

- 寿命測定の詳細
- systematic error
- 現状と今後

I. イントロダクション

table-topの小さい実験です
・原理的にも簡単で学生実験にもなります
・精度を上げるとQEDの高次輻射補正が見られます

### 束縛系QEDの精密検証

- positronium (e<sup>+</sup>e<sup>-</sup>の束縛系)を扱う利点
  - 質量が小さく、強い力、弱い力の影響は無視できる
  - 純粋にレプトンの系、束縛系QEDで完全に記述される
  - 実験的にも、生成しやすい、寿命が長い
  - → 束縛系QEDのテスト(寿命、HFS)や
  - → 新しい物理の探索(exotic decay、CP)に使用されてきた

#### • 束縛系QED

- 非常にシンプルな系であるが、理論的にはたいへん難しい
- 自由粒子と異なり基本的に非摂動論的
  - → 高次輻射補正の計算が困難
- 水素原子とも違う (annihilation processなど)
- **NRQED** (Nonrelativistic quantum electrodynamics)
  - 計算手法の発達。高次輻射補正の計算が可能になった
  - relativistic part(~m)、nonrelativistic part(~mα)を分離して計算
  - 2000年、o-Ps崩壊率 O(α<sup>2</sup>) by Adkins et al

オルソポジトロニウムの性質

 positronium ~ 電子・陽電子の束縛系 スピン1重項(S=0) ... p-Ps (parapositronium) スピン3重項(S=1) ... o-Ps (orthopositronium) → 違いは明瞭、崩壊するγの個数が違う



オルソポジトロニウムの崩壊率

• o-Ps崩壊率(計算值)

$$\lambda_{o-Ps} = \lambda_0 \left\{ 1 + A \left( \frac{\alpha}{\pi} \right) + \left( \frac{\alpha}{\pi} \right)^2 \left[ \frac{\pi^2}{3} \ln \alpha + B \right] + \cdots \right\}$$
$$\lambda_0 = \frac{2(\pi^2 - 9)\alpha^6 m_e}{9\pi}$$
$$A = 10.286606$$

- O(α)補正項約2.4%は実験的にもestablished

- 長い間不明であったO(α<sup>2</sup>)、2000年に計算完了(by G.S.Adkins et. al.)
  - B = 44.52. → 240ppmの補正 ~ 現在の実験精度と同程度
  - O(α<sup>3</sup>)の計算はまだだが、実験精度と2桁の差

 $\lambda_{o-Ps} = 7.039979 \mu s^{-1}$ 

次の実験: 50~100ppmを目指して

# o-Ps寿命測定の歴史







外挿によるpick-offの補正

- Ps生成に物質が必要なのでpick-offをなくすことは不可能
  - → 物質の密度などを変えて真空の値まで外挿~自然な発想 Gas '89 michigan





# pick-offの直接測定

- $\lambda_{pick}(t)$ を時間依存性を含めて直接評価できないだろうか?
  - γ崩壊のトポロジーの違いを利用してpick-offを分離する エネルギースペクトラム pick-off  $\rightarrow 2\gamma$  (monochromatic) E<sub>v</sub>=511keV ~2keV o-Ps崩壊 → 3γ(continuous) pick-off 2γ Ge検出器を用いたγ線エネルギーの精密測定 2γ、3γの数を時間毎にカウント  $\left(\frac{n_{pick}(t)}{n_{3\gamma}}\frac{1}{j},\frac{1}{\epsilon}\right) \in \epsilon(\text{efficiency}) \quad \left(\frac{\lambda_{pick}(t)}{\lambda_{3\gamma}}\frac{1}{j},\frac{1}{j}\right)$ o-Ps 3γ 511keV o-Ps 個数:  $N(t) = N_0 \exp \left( -\lambda_{3\gamma} \int_0^t \left( 1 + \frac{\lambda_{pick}(t')}{\lambda_{3\gamma}} \right) \right)$ シンチレータ検出器による時間スペクトラムの測定 真空での崩壊率

これまでの東大の測定



II. セットアップ

・東大で3度目の実験立ち上げ・100ppmを目指して

セットアップ概要

今回のセットアップ



検出器は立体角のみ考慮(γ線1本) Ge約20%、YAP約30%

- 測定手法: pick-offの直接測定
- 陽電子: β<sup>+</sup>線源 <sup>68</sup>Ge
- 減速材: SiO<sub>2</sub>パウダー
- 2種類のγ線検出器:
   Ge検出器 (pick off測定用)
   YAPシンチレータ (寿命測定用)

真空容器 (線源、減速材)

YAPシンチレータ(4台)

Ge検出器(3台)

線源周りのセットアップ



減速材

シリカパウダー、シリカエアロジェル

- o-Ps生成効率、pick-offを決める重要な要素

AEROSIL R972CF (日本アエロジル)

- 密度 0.03g/cm<sup>3</sup>
- 一次粒子平均径 16nm
- 比表面積 110±20 m<sup>2</sup>/g
- <u>- 疎水処理</u>
- pick-offの割合 ~ 補正巾
  - 直接測定では原理的に問題とならないが、
     エラーが伝播するのでなるべく小さく
  - 平均自由行程(L~300nm)で決まる
  - R972CF  $\mathcal{C}1\%$ ,  $\mathbf{TP}\mathbf{P}\mathbf{P}\mathbf{P}\mathbf{P}(0.03g/cm^3) 3\%$  $L = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} \mathbf{P}_0 \\ \mathbf{\rho} \\ \mathbf{\rho} \end{pmatrix} - 1 \frac{1}{R} \rho_0 = 2.2g/cm^3$
- o-Ps生成効率
  - 粒子径が大きすぎると、フリースペースに
  - → サンプルを変えてpick-off補正の性能をみる

シリカエアロジェル

シリカパウダー





γ線検出器 (シンチレータ)

• 高統計な測定に適したYAPシンチレータを導入

YAP (YAIO<sub>3</sub>)シンチレータ(チェコ製)

- 減衰時間 30ns
- 光量 40% (Nal比)
- 少し青い 370nm
- Z=39
- 物性: 潮解性がなく、硬くきれいな結晶 <u>— 光の減衰長 ~ 20cm</u>

今回使用したYAPの結晶 5cm×5cm×3.3cm



- Nal(減衰時間230ns)と比べて
   pile up が大幅に減少 → 高統計化
- 優れた時間分解能(~400ps)
- → 低エネルギーの時間測定にはbest solution



γ線検出器 (Ge検出器)



# Ⅲ. 解析

- ・長期ラン開始
- 現在、2ヶ月のデータ収集
- systematic errorの評価はこれから

#### <sup>解析の前に</sup> Event selection (pile up除去)

YAP

50ns

150ns

Base gate

Narrow gate

Ge

100ns

1.5µs

- エネルギースペクトラム、time walkを歪めるpile upイベントを除く (ヒットレート Ge: 500Hz YAP: 1kHz)
- ・基本的にaccidentalはトリガーと相関がないので問題ない
- Pile upのないきれいなイベントを選別 3つのADC情報 (Base, Narrow, Wide)



## Time walkの補正

- YAPのtime walk補正 - 速い立ち上がり -  $\gamma$ 線のエネルギーで補正 promptイベント(t~0のp-Ps、pick-off)  $\rightarrow \sigma=1ns$
- Geのtime walk補正
  - 遅い立ち上がり(~200ns)
  - 立ち上がりの時間で補正
  - 遅い立ち上がり成分をカット(約3割)

 $\rightarrow \sigma$ = 3~5ns





# SRT cut efficiency

- SRT(slow risetime)はカットする(約3割) ただし、3γの正確なefficiencyが必要
  - モンテカルロで作る3γのスペクトラム
  - pick-offの割合の算出(efficiency)
- SRT cut efficiencyの評価
  - エネルギー (波高)依存性、
  - Ge位置(電場)依存性などで複雑





#### Ge spectrum

Ge 時間スペクトラム

ここまでで得られた



5. 1~4を時間区分毎に

Ge エネルギースペクトラム

### o-Ps 3yspectrum

- Simulation(Geant4)で形を決める
   陽電子(68Co)
  - 陽電子(<sup>68</sup>Ge)
    - トリガーを鳴らす
    - アンチトリガーは鳴らさない
    - シリカパウダーで止まったイベント
  - 3γ
    - ・ 陽電子が止まった位置で崩壊
    - O(α)のMatrix Element ← established
  - 検出器の応答
    - 分解能は測定値
    - SRT cut efficien cyも測定データから







2γ、3γの分離

3yspectrum



#### Accidentalの差引き

 Accidental領域(2000ns~3600ns)を delayed領域(t1~t2)に規格化して差引き

factor: 
$$\frac{t2-t1}{3600-2000} \times \exp(R_{stop}t)$$



#### 3γの差引き

- 480keV~505keVで3γspectrumを規格化 (pick-offのコンプトンは約3%)
- 3γspectrumを差引きしてpick-offを出す
- pick-off(2γ)、3γ数のカウント

 $N_{pick}$ : 507keV~515keV  $N_{3v}$ : 480keV~505keV

### Pick-offの評価



#### YAP spectrum



→ Decay curve~5т

2 $\gamma$ /3 $\gamma$ 比の小さなエネルギー領域を選択 360keV~450keV  $\rightarrow \epsilon_{2\gamma}/\epsilon_{3\gamma}$ ~0.4 (simulationで評価)





#### systematic error



## MC Ge検出器

Geant4 (with G4LECS) 10<sup>5</sup> - 基本的に良く合う 10' Ph-X - 光電ピーク周辺を微調整 
 ・ 電荷収集の不足
 10<sup>2</sup> pile up 赤線 Geant4 • 黒線 Sr測定 10 systematic error 100 150 200 250 300 350 - pick-offの割合を経由して伝播 - 480keV以下は効かない counts - ピークとコンプトンフリーの比が重要 511keV peak 電荷収集のもれ  $\frac{\lambda_{pick}}{M} = \frac{N_{pick}}{M}$  $\epsilon_{3\underline{\gamma}}$  $\lambda_{3\gamma}$ 10<sup>3</sup> G41% → 100ppm

500 505 510 515 520 525 530 keV

Sr 514keV

450

pile up

400

G4(補正)

500

keV

MC YAPシンチレータ



### Stark shift

•Stark Shift 物質の電場による崩壊率の変化  $\lambda_{3\gamma} \propto \text{Flux Factor} \propto |\psi(r=0)|^2$ 摂動  $\psi=\psi_0+E\psi_1+E^2\psi_2+...$  $\frac{\Delta\lambda_{3\gamma}}{\lambda_{3\gamma}} = E^2 \frac{|\phi_1|^2}{|\phi_0|^2} = 248 \times \underbrace{\left(\frac{E}{E_0}\right)^2}_{\left(\frac{E}{E_0}\right)}$ 電場の2乗  $(E_0 = 5.14 \times 10^9 V / cm)$ 

 Charge up シリカエアロジェル 400~500µC/g → 2×10<sup>-2</sup>ppm

#### 2. dipole moment (Si-OH) → 20ppm





# systematic error('00)

#### まとまってないので、前回の結果を引用

KEK TDC 2GHz clock type→ good Integral Linearity



まとめ

- o-Ps寿命測定は200ppmのレベルに達している
  - 熱化過程に関するズレ(o-Ps寿命問題)は解決
  - もう少し精度が上がればO(α<sup>2</sup>)の補正がみられる
- 新しく実験を立ち上げて、現在データ収集中
   統計は格段に向上
  - prompt付近、unknownなズレの解明が必要
  - 系統誤差の洗い出しと詰めはこれから